

特集「政策をめぐる技術と社会」

巻頭言

中村祐司（地方自治論担当教員）

この授業の特徴として、題材の対象が非常に広いということが挙げられる。

職業柄、主要新聞各紙と地元紙には目を通し、授業の資料も新聞報道を活用することが多い。それでも実際に授業で取り扱う課題となると、教員の持つアンテナの力量に左右されるのは避けられない。また、教員が行った現地調査で得た資料や知見を授業で用いる機会もある。しかし、当該課題について多少は深く掘り下げることができたとしても、今度はヨコの視点の広がりというのか、包括性・網羅性にどうしても欠けてしまう。授業名から連想されるイメージの広さもある。

当初は統一テーマを設定して、それについて各受講生が原稿を作成する方向で考えていた。ところが、受講生全員にとって興味・関心のあるテーマの設定は、たとえ少人数授業でも実際やろうとするとなかなか難しいものである。そうであるならばと逆に開き直って、テーマ自体を各受講生が自分で見つけるようにした。ところが、今度はこれが専門科目ならともかく、教養科目であるがゆえに一部の受講生にはかなりの戸惑いを与えてしまったようである。好きなテーマで書いていいといわれても、いざ書こうとすると題材はなかなか見つからないものである。

そこで、まずは各自のテーマ探しから始めることにした。「しゃべる」「話す」という行為と「書く」という行為とでは、集中し、注がなければいけない知的エネルギー（知力）には10倍以上の差があるのではないだろうか。後者が前者の10倍という意味である。そのかわり話しというのは、録音しない限りはその瞬間から消えてしまう「はかない類」のものである。それに対して書くというのは、紙媒体であれ電子媒体であれ、活字という形での痕跡を残す行為である。いわば、何かを残そうとする「苦行」に近い行為のかわりに、時間が経過しても他者との内容共有（時には問題意識や視点の共有も）が継続する何とも魅力的な特性を有しているのである。

書くという行為にチャレンジして、できあがったのが特集「政策をめぐる技術と社会」である。地方自治論に倣って、以下の4本の原稿に共通する特徴・課題・視点を見出そうとしたものの、今回は断念せざるを得なかった。また、4本の原稿を一つのまとまりと捉え、「はじめに」や「おわりに」を盛り込むことができなかった。しかし、いずれの原稿も政策にかかわるし、それをめぐる広い意味での（考察・思考）技術と社会について論じたものである。

そのうちの2本（項目1と項目3）は、大学に入学して初めての原稿作成に取り組んだ成果であり、手書き原稿1本（項目2）は豊富な経験を通じた知見の蓄積がもとになっている。もう1本（項目4）については、テーマは異なったとしても今後の卒論作成のステップとして位置づけられるように思われる。

2014年1月20日